



菅波 茂

ミャンマーの中部にメッチーラという小さな市がある。第二次世界大戦中に、この地でたくさん日本兵が戦死した。このメッチーラ市民病院にAMD Aが関与している子ども病棟が設置されている。同時に郊外の数力所の村での巡回診断を行っている。この地域では明日の食事を心配している家族も多い。

ここでは貧しい村民向けに緊急基金が設けられている。分べん時の大量出血、大けが、ひどい化のうなどで治療費が多額となり、支

緊急基金

払いが不可能な場合に使われる。この基金は村民が巡回診察を受けたとき、薬代の3割ぐらいのお金を積み立てたものである。最初はこの緊急基金の意味がよく分から

なかった村民たちも、自分たちがこの基金によって助けられること

で、次第に基金への理解が広がっている。

「薬代を取られているのではない。いつか自分たちが大きな治療をするときに備え、積

み立てているのだ」。「たとえ自分たちが使わなくても、誰かがその恩恵に浴することができる」。

ミャンマーの人たちの8割は敬いんな仏教徒。この緊急基金は相互

扶助の精神、すなわち「困った時はお互いさま」の世界を実現させている。普通の相互扶助とは知っている者同士の間での助け合いだが、この緊急基金は知らない者同士を強く結び付けている。わたしたちは「開かれた相互扶助」と名付けている。

緊急基金のおかげで、多くの子どもたちがメッチーラ市民病院のこども病棟で治療を受けている。

そこには岡山で技術研修をしたやさしい女医さんと2人の看護婦さんが頑張っている。「岡山のみなさんに感謝しています」。彼女たちからのメッセージだ。

(アジア医師連絡協議会代表、題字は筆者)